

序言

地名研究者の谷川健一氏は、「地名には地域の人たちの生活感情が込められ（中略）自己確認のためには地名がいちばん日常的だし基本だ」と述べている¹⁾。地名は地図や文字に記された機械的のものでなく、生活と密着したもので、谷川氏が「生活感情が込められた」と表現したまさに「生きた地名」であった。普段何気なく暮らす集落の下にある地名は、地域の維持発展を支えてきた生業に根差した「民衆知」そのものであり、地域の特質を表象するものでもある。近年の地域おこしや地域づくりが活発化する中で、躍起になって探し求められている「地域資源」の一つが地名ではないかと考えている²⁾。

しかし、地域では「生きた地名」は消失の危機にある。農村では圃場整備で大幅に景観が変わり、小地名の聞き取り記録が難しくなっている。比較的景観変化がゆるやかだった山村では過疎高齢化が進み、集落が消滅することによって地名や生活誌の消失が危ぶまれている³⁾。このことに危機感を持った研究者たちが、全国各地で地名や民俗の記録を続けているが、個々の研究者ができることには限界がある。また、調査や記録をまとめた研究論文や学術報告書に一般の住民が触れる機会は少なく、その成果を地域に還元し、伝承や活用へつなげる取り組みはほとんど行われていない。

高知県四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」は、こうした記録を地名や民俗の伝承者である住民自身が行い、地域で共有化していく取り組みを進めるため、2016年1月に地域の地名や歴史民俗に関心を持つ住民有志で結成された⁴⁾。調査団は、地名を歴史資料として再評価し、全国の集落で古老に聞き取り調査を行って不記載地名や民俗誌の収集・記録に努めてきた九州大学服部英雄研究室の調査手法を参考に⁵⁾、高知県西部の四万十地域を中心に集落での地名民俗調査を続けている⁶⁾。

本書『続四万十の地名を歩く』（地域資料叢書 23）は、2020年に刊行された『四万十の地名を歩く』（地域資料叢書 19）の続編にあたり、調査団の調査報告書第5冊である。今回は、高知県西部・四万十地域とその周辺の幡多郡・高岡郡を対象地域としている（図1）。高岡郡梶原町は中世に京都・下賀茂社の荘園だった「津野庄」、幡多地域は撰閑家の九条家（後に一条家）の荘園だった「幡多庄」の領域にあたり、調査した集落は荘園の故地にあたる。荘園支配の文書は、荘園中枢の須崎市や旧中村市（四万十市）、土佐清水市などに関わるものがほとんどで、荘域の多くの中世の様相を知る史料は確認され



奥四万十山の暮らし調査団の
聞き取り調査の様子

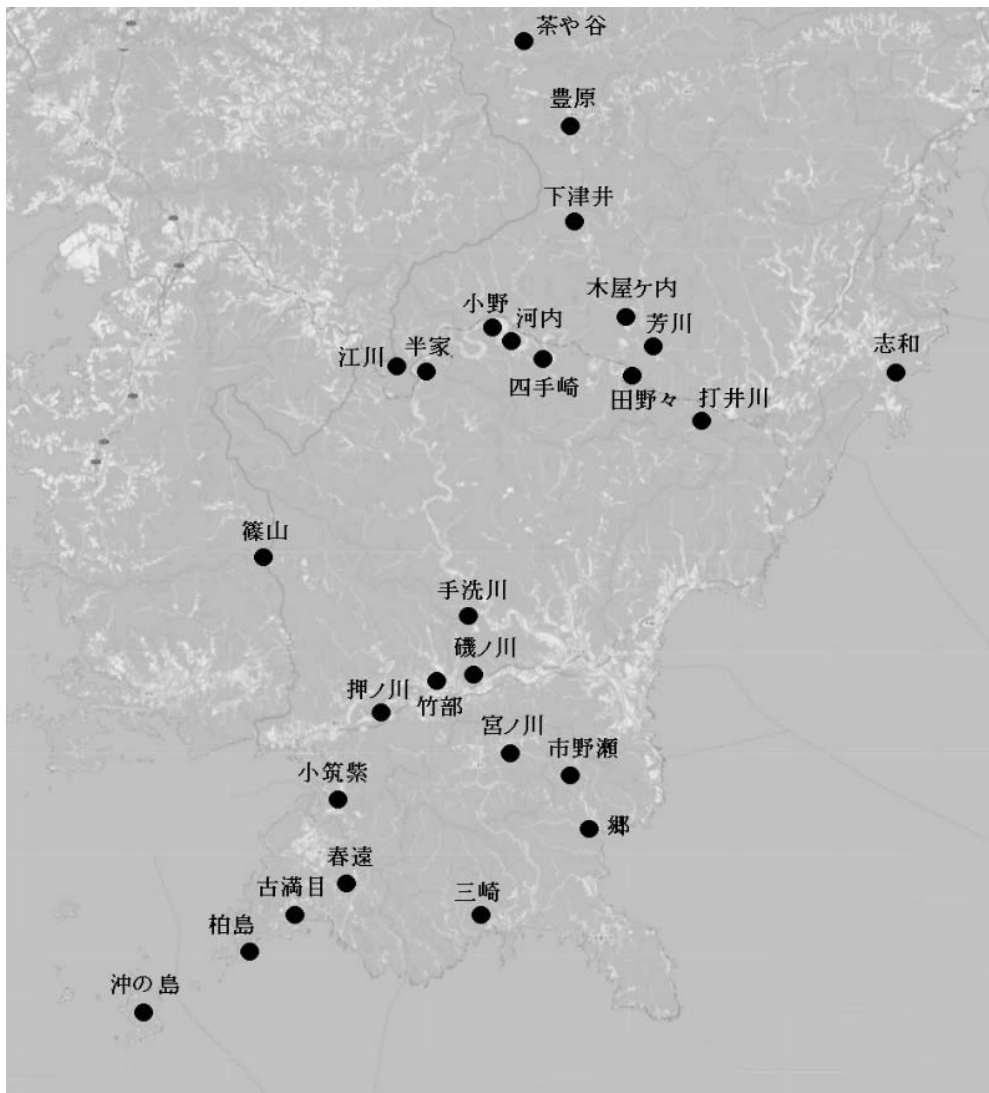


図 1 本書で紹介する幡多郡・高岡郡の集落と地名

ていない。しかし、土佐には一国単位で残る戦国末期の『長宗我部地検帳』が存在し、記載地名を現地比定していくことで、現在の集落景観の原型となった中世の村々の様子を想像することができる。本書は、地名の記録とともに、歴史地名を使った村落景観の復元にも挑戦しており、荘園故地の現地調査報告書の性格も持つ。

本書には、調査団のメンバー8人が当該地域の歴史民俗に関する調査研究成果をまとめた論考11本を収録した。第1章は「四万十の地名を歩く」で、四万十川中流域の四万十町の集落調査の成果4本を載せた。ここでは、江戸時代の村にあたる大字ごとに地域史を描く手法を用いている⁷⁾。調査手法は、古老への聞き取り調査と文献史料の分析を組み合わせ、歴史地名の現地比定・記録を行うとともに、ミクロな地誌を描いている。聞き取り調査は、海岸部の志和、山間部の木屋ヶ内・芳川、四万十川沿いの四手崎と性格の異なる集落で行った。各論は、『地検帳』に見る村落景観と「昭和期の村の姿」の2章立てで整理し、中近世の村落景観の復元とエネルギー革命以前の昭和期の生活史を並列する形で記している。

一部差別に関する項目もあるが、地域の歴史として記録を残すことが重要と考え、詳細に記述している。また掲載地図のベース地図には、国土地理院のGSIMapsを利用している。

第2章は「四万十の地名を探る」で、昭和6～8年に旧大正町で行われた大規模な材木搬出に伴う資料紹介と、流域のタタリ信仰の調査記録を報告し、四万十の山の暮らし、祭礼に代表される信仰の実態を明らかにしている。第3章は「四万十の地域資源地図」で、田野々・志和



聞き取りで作成した調査地図

での現地調査を基に作成した2枚の地域資源地図について解説している。第4章は「幡多地域の歴史と民俗」で、中近世の幡多に関する文献史学の論考2本と、幡多地域を含む民俗学の論考1本を載せた。戦国期の港や江戸初期の愛媛と高知の藩境の実態、道祖神信仰の背景を考察している。

本書では、幅広い年代と分野の研究者たちの協力で、高知県西部をフィールドに多くの調査記録と研究成果を蓄積することができたと考えている。本県では2021年度から新しい『高知県史』の編纂もスタートしている。本書が基礎資料となり、県西部の歴史研究が一層進展することを期待したい。

(楠瀬慶太)

【註】

- 1) 大江修編 2016『谷川健一の世界』富山房インターナショナル
- 2) 楠瀬慶太 2019「地域資源としての地名—消えゆく地名と村落史研究」『地名と風土』13
- 3) 武内文治 2019「『四万十町地名辞典』への記録活動から」『地名と風土』13
- 4) 楠瀬慶太 2009「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『政策経営研究』2009.vol1.
- 5) 代表的な成果に、服部英雄 2001『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名・しこ名』（花書院）、服部英雄 2000『地名の歴史学』角川叢書、服部英雄 2007『峠の歴史学』朝日選書などがある。
- 6) 奥四万十山の暮らし調査団 2018『土佐の地名を歩く』（地域資料叢書17）の「第1章入門編—土佐の地名の調べ方—」を参照。
- 7) こうした大字を対象とした研究は「大字誌」（大国正美 2013『『大字誌』の限界と地域史編纂』『Link：地域・大学・文化』5、西村慎太郎 2021『大字誌浪江町権現堂』いりの舎など）として注目をされているが、荘園の現地調査では1990年代から盛んに行われている視点であり、本書もその延長線上にある。